

四国遍路の最難関と言われる十二番札所・焼山寺へ“山また山の登山”

私は2013年5/12~6/17の37日間かけ四国88カ所1200kmを歩いて来ました。さて、ドキドキの遍路初日も無事に公園に張ったツェルトで寝ることができました。

二日目は8~11番まで回る。出発時に18kgあったザックも途中で荷物が重いので必需品以外は家に郵送する。後日あと2回、使っていない物を送り返した。二日目の泊地に決めた11番手前の有名な善根宿の「鴨の湯」へ、人に聞きながら逆戻り。風呂屋さんが提供する善根宿なので、風呂に入り快適な小屋泊まり。自転車を借りて夕食の弁当ビールを買い込む。3~4日目は山越えなので、大量に朝昼夜二日分の食糧も買い込む。鴨の湯で埼玉県の牧君18歳と同宿。親の仕事を継ぐ前に自分を見つめ直してみたくて遍路しているとの事。以後2日間は彼と前後しながら一緒だった。ほぼ毎日4時起床、5時半出発。善根宿とは宿のお接待で、地元の奇那人が遍路に一夜をとってもらうために自宅の一間を提供したり、専用に小屋を建てて遍路に無償で提供してくれる宿。雨露をしのげて横になれ、何よりも安全である。2ヶ所程食事の提供がある善根宿もあり、体調の優れないおばあさんから「今夜はわずかなおかずと缶ビールしかないけどこれで我慢してください」と提供され涙した事も。お風呂まで用意している善根宿もあり、高知県では銭湯のお風呂代まで出して頂いた事も。遍路にとってはどれだけ助かる事か。毎日やってくる無数の遍路に等しくお接待する四国遍路のお接待は、TVで有名人が知ったような事を言っているお接待とは中身が違う、決して見返りの無い奉仕である。**三日目**は八十八ヶ所中最難関の12番札所の焼山寺だけしか行けなかった。有名な急坂難所の「遍路ころがし」が6カ所あり、登山で山は慣れているが、それにしても山また山のメチャ山奥で、何でこんな山奥で作るのへと、気力がめげそうになる。一般の人には体力も気力もちょっと難しい行程である。

思うこと歩いていると遍路道の道中には色々な短冊が掛かっている。励ましの言葉や和歌や仏の教えなど。いやでも何百回となく目にする。一人で黙って果てしなく歩いていると、その言葉が自然に心に入ってくるようになる。衣食住以外に考えることが無いから、いやでも短冊の文言について考えてしまう。なぜしんどい目をして遍路しているのだろうと考え始める。やがて果てしなく歩く苦行と文言が結びつく時がやってくる。この三日間、無心に歩きながら感じたこと。「遍路旅は人生の縮図体験をしているのではないのだろうか?」「旅は人の一生そのものではないのか?遍路旅と同じく人の一生も、楽しかった彼の地の思い出を全部残して、今朝は新しい地へと旅立つ。それは今朝も、人生最後の時も同じである。今日はどんな楽しい事に巡り合い、どんな人に逢うのか、昨日に未練を残さず今日に希望だけを持ちワクワクしながら今朝は一步を踏み出し旅立つ・・・」。その思いは、遍路が終るまで変わる事が有りませんでした。その後は、お接待に感謝しつつ、その思いを更に追体験でき積み重ねる事が出来ました。自分を見つめ直す事は、歩くことにより得られるものと確信しました。

次号は、徳島を巡り、8日目にいよいよ高知県へ。雨にうたれ二日間歩きっぱなしで大阪へ帰りたくなった事、泣きそうになり辿り着く室戸岬。予定地に泊まれず夜中に歩いた話。お接待で人の情けに涙し、波乱万丈の旅はまだまだ続くのであります。